

震源、「78年」と近接

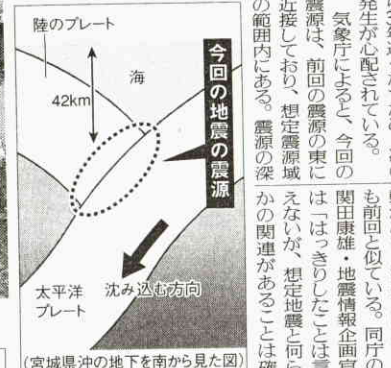
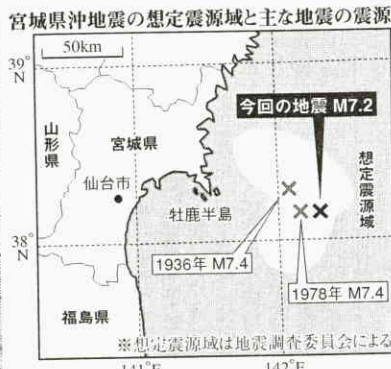
宮城地震

想定地震? 予兆?

少ない余震
前回と同じ
気象庁、慎重分析

高い確率で大地震の発生が予想されていた宮城県沖で16日、マグニチュード(M)7.2、最大震度6弱の大規模な地震が発生。その揺れは、北海道から四国にかけての広い範囲に及んだ。28人の犠牲者を出した前回1978年の宮城県沖地震からちょうど30年。今回の揺れは、「今後30年以内に99%の確率で発生する」とされ、大地震なのか、それともさらに大きな地震の予兆なのか。その時に備えてきた地元には、戸惑いが広がっている。(本文記事一面)

政府の地震調査委員会が「沈み込む境界付近で周期上がる時に起きるプレート「ト境界型」の地震。過去の海側の太平洋プレート(岩でたまったりずみに限界に達し、陸側のプレートが跳ね



地震によって壊れた自宅の外壁を負つめる住民(16日、宮城県川崎町)

今回の地震と前回の宮城県沖地震との比較

	今回の地震	宮城県沖地震(1978年)
地震の規模	最大震度6弱、M7.2	最大震度5弱または強(※注)M7.4
余震(震度1以上、震後8時間以内)	9回	5回
被害の状況(人的被害)	死者なし、負傷者59人	死者28人、負傷者1325人
被害の状況(住宅全壊)	1棟	1183棟
被害の状況(住宅半壊)	0	5574棟

※当時の震度階級では震度5

宮城の住宅、全半壊なし
防災対策が奏功

前回の宮城県沖地震の規模はM7.4で、最大震度は震度5。Mは今よりもや大きい。最大震度は現行の震度階級に換算すると5弱から5強に相当する程度だ。今回より揺れは小さかったにもかかわらず、死者28人、負傷者1325人、負傷者1325人と、今回の被害を出した。と比べると、今回は屋内ブ

ールの天井が落下した仙台市東区のスポーツ施設を、今回の木造家屋に被害を及ぼす短い周期の揺れが、前回の宮城県沖地震は、震度M7.1、負傷者174人、同年7月の地震(M6.4、負傷者677人)より人的被害は少ない。県内の建物被害も住宅47棟が一部損壊しただけで、全壊や半壊はなかった。

東北大学制御研究センターの廣井脩・東京大学大学院教授(災害情報論)は「仙台市や宮城県の住民には、78年の宮城県沖地震の記憶が残っているのに加えて、地震の発生確率の数字が浸透し、防災対策も進んでいる。今回、公的機関の被害想定よりも実際の人的被害がそれほど大きくなかったのは、備えた住民が少なからず、防災対策が功を奏したのかもしれない」と話している。

スカパー SCANNER

余震の分析を進めて見極めたい」と語った。一方、今回の地震は、前回とは異なるプレート境界の領域が動いて引き起こされた可能性があると指摘する専門家も少なくない。

41か所の広帯域地震計の記録を解析した結果に基づき、東京大地震研究所の山中佳子氏は、78年の地震の東側に隣接した異なる固着域が動いた可能性が高いとしている。

東側の固着域が動いた場合、同規模の地震が今後、起きる可能性がある。東北大地震・噴火予知研究センターの長谷川昭教授は「今回の宮城県沖地震を誘発する可能性もあ

結果をもとに計算した。西側のか、地震の波形や津波のデータから、詳しく分析する必要があり、指摘する。また、今回の地震について、東北大学制御研究センターの今村文彦教授は「地震の規模がM7.2と大きい(震源がM7.2)と推定されるという。GPS観測では、同県仙台市に動いたのが始め、同県東松島市などが4センチほど移動していた。

「想定される宮城県沖地震のエネルギーは解放されきっていない」と指摘。「今回の地震が前震となっており、本体の宮城県沖地震を誘発する可能性もあ

最大震度6弱という大規模の間に危機意識が高まってきた。宮城県内には、しかし、宮城県内には、耐震補強が施されていない。耐震補強が施されていない。耐震補強が施されていない。

油断せず「耐震」徹底を

「油断せず」耐震徹底を。油断せず耐震徹底を。油断せず耐震徹底を。

「油断せず」耐震徹底を。油断せず耐震徹底を。油断せず耐震徹底を。

固着域 * プレート境界には、比較的滑りやすい部分のほかに、通常は強く固着して滑っていない部分がある。この部分を固着域という。固着域が急激にずれると、大地震につながる。ずれにくい部分は、海洋プレート表面の凹凸のため生まれると考えられている。